**実在的なものと生政治**

守永直幹

１ フーコーにおける生政治と人口の問題

現代の社会科学がどこに、どんなリアリティを求めるべきかという問いを前に、ここで特に目新しいことを述べるつもりはありません。ミシェル・フーコー、ジョルジョ・アガンベン、ハンナ・アレントの仕事の意味を生政治との関わりでごく手短かに概観するにとどめます。

フーコーが残した仕事の出発点が公衆衛生学、すなわち医療と社会の関係を問うものであったことは銘記されねばなりません。７０年代後半のコレージュ・ド・フランス講義では、ヨーロッパ近代における「統治性」の問題が主題化される。領土から人口へと考察を進めるうちに、この問いに向き合うことになったと彼は述べています（「統治性」、ちくま学芸文庫『フーコー・コレクション６ 生政治・統治』小林康夫＋松浦寿輝＋石田英敬訳、238頁～277頁）。

マキャベリ『君主論』における領土とは、臣下および領土にたいする君主の関係を意味します。君主の使命はこの意味での「領土」を護ることで、必ずしも住民を護ることではなかった。１８世紀のヨーロッパにおいて人口が拡大し、通貨の過剰が生じます。それが農業生産の増加に結びつき、いよいよ人口は増大する。この循環プロセスのなかで人口問題が浮上します。それはもう父＝王が支配する家政＝経済モデルでは扱いようがない。

これまでの統計学は行政的な枠組み、いいかえれば「主権」の内部で機能していた。いまやこの学が人口には固有の規則性があると発見する。死者の数、病人の数、事故の規則性等々、様々な現象が計量化される。それらが家政という小さな枠組みに還元し得ないことは自明です。統治のモデルとしての家族は消え去る。ここに政治経済学が成立し、経済と人口の問題に容喙するようになる。領土から人口へというパラダイム・チェンジが生じます。

現代における統治の大きな目的とは、人民の境遇を改善し、その富や健康や寿命を増大させることです。ようは「長生き」が国家と国民の共通の目的となった。そこにいわゆる「生政治」の網目が蜘蛛の巣のように張り巡らされ、私たちを個人という枠に縛りつける。個々人を外からも内からも支配せんとする。

どう人口をコントロールすべきか考えるのは、もっぱら政治的な問題です。なぜなら１つの社会が自らをどう捉え、どの方向に向かうべきか選択するというヴィジョンに関わるからです。実際には、人口を思うままコントロールすることなど誰にもできません。生殖と出産および長生は１つの民族の無意識と関わり、ひいてはその社会が置かれた自然史的・歴史的状況と関わります。天変地異も起これば、パンデミックも起こる。その舵取りは容易ではなく、まさに近代の政治学の可否に関わってくる。

２ 我らホモ・サケル

フーコーの問いを継承しつつ、ジョルジョ・アガンベンは「私たちの政治は今日、生以外の価値を知らない」と喝破します（『ホモ・サケル』高桑 和巳訳、以文社、19頁）。

現代人が生命として理解するものをギリシャ人は２つの語で区別していた。生けるすべての存在に共通し、たんに生きているという事実を意味するのが「ゾーエー」（zoé）。１つひとつの個体や集団に特有の生きる形式が「ビオス」（bios）です。

アリストテレス『政治学』は、人間がたんなる自然的な生（ゾーエー）に甘んじる存在ではなく、ポリスの中で善を求めて生きる存在、その限りで政治的存在だと定義した。人間の政治は動物の政治や（そんなものがあるとして）神の政治とは異なる。それは人間が幸福を求めるばかりか、正義をも希求する存在、倫理的存在だからである。アリストテレスにおいて問われるべきはビオスであり、それ以外の何ものでもない。

ところが近代が始まるとともに、この定義が大きく揺らぐ。人間は自分の生そのものを問い質す奇妙な動物として姿を現わす。人間の生物学的な生、「剥き出しの生」（la nuda vita）が、その動物性そのものが問いにかけられるようになった。

先ほども見たように、領土の拡張と保全を目的としていた国家が、国民の健康と安全をも気遣うようになった。人間を一種の動物として、いわば家畜として管理し統治する方法が練り上げられて行った。人間であると同時に動物でもある存在、もっと言えば機械でもある存在が都市国家という舞台に姿を現わす。

一方において、個々の人民の自然的な生に配慮しつつ、彼らを国家に統合する政治的な技術が発達した。これが客観的全体化の方法である。他方において個々人は、外なる権力と結ばれつつ、自己同一的な意識を洗練させる。これが主体的個体化の技術です。西洋近代国家は両者を統合し、そのシステムを世界に広げてゆく。

この全体化と個体化がいかにして交わるか、それがどんな帰結を招くかという問いに、Homo sacer（聖なる人）という形象から出発しつつ、ひとつの回答を与えようとするのがアガンベンの意図です。おそらくはアレント『全体主義の起源』を手がかりにして、アガンベンはこれを現代社会全体の強制収容所化という問題に結びつける。

ローマの古法に見出されるホモ・サケルとは共同体の法から放逐された存在で、人々はこれを罰せられることなく殺害できる。かれは供犠儀礼に掛けられることも、神への犠牲と見なされることもない。いかなる名誉や栄光とも無縁なまま打ち捨てられる。

ところが、そんな存在を逆説的な形で自らに包含することで古代社会は自らの力と栄光を他に示す。秩序の周縁で無為に殺される存在が逆説的に秩序そのものを担保する。のみならず後に「サケル」という語は「聖なるもの」という超越的な後光をも帯びる。この上なく貧しく惨めな存在が、聖なる栄光の身体を獲得するに至る。

近代国家の規律化・規格化に追い立てられ、人びとはこの上なく隷属化し、剥き出しの生に放置される。そこには主体化もまた働いていて、この赤裸の生を救い、自らの内に包摂することで、剥き出しの生に形をあたえようとする。ここに近代民主主義が誕生する。

この上なく無惨に人が隷従させられる、その場が同時にこの上なく激烈に人間の自由と幸福が賭けられる場となる。その過程で近代の民主主義は、虐げられた惨めな人々（レ・ミゼラブル）を救わんとして、政治をメディア的かつスペクタクル的な見世物にしてしまう。

民主主義のルールに乗っかり、この見世物に参加することで民衆は自らの代理人を得る。大衆の王が無責任な見物人を煽動し、ついに立場を逆転させる。かつて政治から排除されてきた存在が、いまや権力の中枢を奪取する。主人と奴隷の弁証法において、かつての奴隷たちがかつてない暴君と化す。民主主義は容易に全体主義へと転落する。

コロナ禍という異常事態を前に、世界の多くの国家が既成の法を拡張し、時に放棄して、社会の存命を図ろうとしています。ゾーエー（生物）として社会集団が生き残りを図ろうとすれば、医学的・生物学的な配慮が必要不可欠です。それはビオス（生活）を維持する経済的・社会的な計算に裏打ちされねばならない。あれかこれかの二者択一ではなく、そのどちらも包摂せざるを得ないのが現代の政治、すなわち生政治の実態です。

それには専門家の協力が欠かせず、メディアによる国民への呼びかけも必須です。ところが専門的知識は誤りやすく、メディアは見世物化しやすい。現代社会は急速に強制収容所化しています。コロナ禍をきっかけに生政治の破滅的な動向が誰の目にもはっきりしてきた。

３ 公共性の光のもとで

周知のように『人間の条件』の劈頭でハンナ・アレントは人間の活動力を労働（labor）、仕事（work）、活動（action）の３つに区分しています（志水速雄訳、ちくま学芸文庫）。これを彼女の定義とは少し違うかたちで整理してみましょう。

《労働》は人間の肉体的・生物学的条件に支配される。そこでは人間の条件は生命それ自体です。いわば人間文化の初源的形態で、アガンベンの用語を用いるなら「ゾーエー」の次元だと言ってよい。

《仕事》は自然環境を超え出た人工的な世界を創り出そうとする。そこでは積極的に「ビオス」が問われ、ここに文明が成立すると見なせます。それは（アレントは気づいていませんが）市場により支えられる社会です。

《活動》は人間の多数性を条件とし、人と人との間で直接的なかたちで行なわれる活動、すなわち公的な次元での政治行為です。この場合の政治とは人間が人間たることの証明であり、その不死への努力を言祝ぐものです。

現代においてギリシャ的な意味での政治は失われ、平等を求める社会が公的領域を支配するに至った。個性的な活動の意味は見失われ、画一的な行動が求められる。近代の経済学によれば、人間はたんに行動（ビヘイヴ）するのであって、お互いに活動するのではない。いいかえれば、たんに他人をうわべだけ真似るに終始し、切磋琢磨しつつ何か価値ある新しいものを創造せんとするのではない。

近代における社会の勃興とともに誕生した経済学が、統計学を技術的な道具として用いることで社会にとっての「科学」になったという事実にアレントは注意を促す。一定の行動パターンに従う市民が正常と見なされ、規則に従わぬ者は異常と見なされる、そんな画一化された社会の到来に統計学は主導的な役割を果たしてきた。

というのも政治的な偉業とか、歴史の変革はめったに起きない。にもかかわらず、そんな出来事が過去に起きたからこそ、私たちの日常や歴史は今のようになっている。異常で異例な事件は今後も起きるだろう。なのに、その可能性をあらかじめ取り除くのが科学であり、それによりリアルな社会を描き出すことができるかのように振舞うかぎりで、統計学および近代の経済学は政治の意味も、歴史の重要性も取り逃がすほかはない。ようは実在的なものの取り違えが起こっているのです。

アガンベンが強調するように、アレントの思考はフーコーと共通点が多々あります。が、大きな違いもあって、それは「公的なもの」をどう捉えるかに依ります。アレントは失われた公的なものの光を求める。フーコーは公的領域を取り戻そうとするよりは、ひとりのニーチェ主義者としてギリシャの曙光に還って行ったという印象があります。

アレントによれば、万人によって見られ、聞かれ、可能なかぎり最も広く提示されるのが公的なものです。「顕われ（アピアランス）がリアリティを形成する」と彼女は述べる（75頁）。私たちが見るものを同じように見聞きする他者の存在、そんな他者への信頼こそが公的世界のリアリティを形成するのです。

公的領域が衰退し、それに代わって私生活が発達した挙句、現代人は政治的なリアリティではなく、家族的な「親密さ」を異常なまでに重視するようになった。リアリティを犠牲にすることで親密さに過剰な意味が付与される。大衆社会において公的な光の顕われは一顧だにされない。とするなら、社会はひたすらリアリティを失うだけになります。閉じた関係のなかで相互承認（ようは相互監視）に汲々とする社会は、この上なく無責任な社会と化すでしょう。

たんに親密なものの眠りにまどろむのではなく、公的な光の下で動き、働き、語るとは何かが問われねばならず、実際にそうした公的領域が再構築されねばならないでしょう。その意味で社会科学の責任は、これまでになく重大だと言わざるを得ません。かつて存在したこともなく、今ここにもない社会、かつても今も実在したことがない人間集団とその社会を思い描き、構想する想像力こそが求められているのです。